

江戸時代に普及したサツマイモの様相について一考察 —1735年「諸国産物帳」の中のサツマイモの系統—

熊本県大津町「明日の観光大津を創る会」会員

にしむら かずまさ
西村 和正

1. はじめに

本稿では、1605年から1735年にかけて普及したサツマイモの様相を諸国産物帳の中のサツマイモの系統がわかる彩色図や文献等により報告をするものである。

安田健氏の「江戸諸国産物帳 丹羽正伯の人と仕事」¹⁾によると、諸国産物帳はわが国で初めてなされた本格的かつ最大規模の生物相の調査であった。産物帳の調査が始まった享保20年（1735）は、ちょうど青木昆陽が大岡越前守忠相の命により小石川薬園でさつまいもの試作を始めた年である。それゆえ、従来はわが国におけるさつまいもの普及は（沖縄、九州地方は別として）、この年から数年以後のことであると考えられていた。しかし、この年に記された各地の産物帳のうち、九州、山陽の諸国は当然として、東日本では伊豆、加賀、越中および佐渡の四ヶ国にさつまいもが記載（別表の「享保20年（1735）諸国産物帳に現れた甘藷の記事」（以下、「別表〇〇番」と略す。）されている。この四カ国のうち伊豆と佐渡は幕府領であったことが注目されると述べている。

一例であるが、八丈島誌や近藤富蔵著「八丈実記」²⁾に、1723年と1727年に八代將軍吉宗が八丈島に配布した薩摩芋種は、琉球

国から献上された白サツマ（甘藷）であるという。このように、吉宗は、青木昆陽に試作させるに先立って直轄領に白サツマ（甘藷）を作付けさせている。名君といわれる所以である。

2. 琉球・沖縄に伝来した蕃薯（サツマイモ）の史料

琉球王府が編纂した1713年「琉球国由来記」³⁾には皮赤實白・皮実とも白・皮実とも黄・皮赤実黄の4種類を挙げている。皮赤實白の蕃薯（赤芋）は、1605年野國總管が伝えた第一次伝来で、他のイモは、17世紀末に伝えられた第二次伝来である。以下、年代順に検証してみる。

（1）第一次伝来の蕃薯（赤芋）に関わるもの

- ① 1611年尚寧王の島津藩主へ献上
薩摩島津藩では、「歴々の調味とし、軽きものは食する事能はず」とあり、嗜好食品として珍重されている。出典「通航一覧卷四・琉球国部四」の『島津琉球軍精記』
- ② 1615年イギリスの航海士ウィリアム・アダムズ（三浦按針）が琉球のイモを平戸イギリス商館長リチャード・コックスへ贈呈。出典「コックス日記」

享保20年（1735）諸国物産帳に現れた甘藷の記事 【出典：安田健著『江戸諸国産物帳』丹羽正伯の人と仕事（晶文社、1987年、111頁）】	
1	陸奥国（南部領・三春領）＝なし
2	出羽国（庄内領・三沢領）＝なし
3	常陸国（水戸領）＝なし
4	下野国＝なし
5	佐渡島＝甘藷（りうきう芋、さつまいも）他邦より来る。
6	越後国＝なし
7	越中国（砺波郡）＝りうきういも（甘藷の内）……葉色青赤く、芋長く色黄白し。春土用前後 暖になるころ蔓生え、これを四、五月の内に切り分けて植える。 秋の土用過 20日ばかりの内にできる。 あかいも（甘藷の内）……葉色青白く、芋長く色赤し。以下同前。
8	能登国（羽咋郡・鹿島郡）＝赤いも（紫藷）……葉色青く、茎色赤し。芋少し長く、または短し。色白し。
9	加賀国（能見郡）＝りうきういも……葉は山のいもの葉に似る。厚く広い。蔓茎とも紫色で、根も山のいものに似て太く短い。秋土用過掘取る。 赤いも……葉は赤め桐（赤め柏カ）の葉に似て、小ふり、色青し。 根は、りうきういものに似て色は紫色、秋土用過に掘取る。
10	越前国＝なし
11	信濃国（高遠領・筑摩郡）＝なし
12	伊豆国＝薩摩芋……是は芋種被下置、以後、村々にて作仕、夫食罷成候。
13	遠江国（懸河領）＝なし
14	美濃国＝なし
15	尾張国＝なし
16	和泉国岸和田領＝さつまいも
17	紀伊国＝薩摩いも（りうきういも）
18	播磨国（網干領）＝なし
19	隠岐島＝なし
20	出雲国＝なし
21	備前国・備中国＝甘藷（さつまいも）
22	長門国＝甘藷（りうきういも）。 赤芋（唐芋または紫芋）……茎をボドウという。
23	周防国＝甘藷（りうきういもまたは唐芋）。 赤芋（唐芋）……茎をボドウという。
24	伊予国（越智島）＝りうきういも
25	對馬国＝孝行いも（薩摩いもまたは琉球いもともいう。『大和本草』菜類にいう、甘藷）。 あかいも（『大和本草』菜類にいう、蕃薯）。
26	壱岐国＝赤芋、唐芋、蕃薯（琉球芋とも、孝行芋とも、薩摩芋ともいう）
27	豊後国の内、熊本領＝赤いも
28	肥後国の内、熊本領＝蕃薯（りうきういも）
29	豊後国の内、米良山領＝なし
30	肥前国の内（基肄養父領）＝赤いも
31	日向国（諸縣郡）＝から芋
32	筑前国＝りうきういも（唐いもとは別種）、唐いも（赤いも） *安田健氏『江戸諸国産物帳』（晶文社、1987年、53頁）より

*番号は筆者記載

- ③ 1645年『毛吹草』と1669年『料理食道記』に薩摩の名物として「赤芋」
- ④ 1663年『李朝実録』「顕宗四年（1663年）南海県民・金麗暉（キムヨフィ）らが琉球に漂着し、皮が赤く肉が白く、ふかして食べると味がヤマイモのようなもの」（むくげの会編『新コリア百科』⁴⁾）。
- ⑤ 1683年冊封正使汪楫『使琉球雑録』の物産に「番薯」（朱薯）
- ⑥ 1691年長崎県島原の『小浜由来記』（熊本県松島町史）「唐芋、元禄四年（1691）より当地に作る。琉球芋とも云う。栗に少々味違うにより、八里半とも云う」、『心中大鑑』宝永元年（1704）「八里半といふ芋、栗に似たる風味とて四国にありとか」。また、「大村家覚書」十一巻（藤野保氏「甘藷の関東伝播に関する一資料」⁵⁾）に、1732年享保の飢饉後の翌年、大村藩から町奉行大岡越前守宅へ種子甘藷（琉球芋の八里半）三百斤を差出しているという。
- ⑦ 1697年宮崎安貞著『農業全書』の蕃藷（あかいも、りうきういも）色薄紫、内いさぎよく色白し。薩摩や長崎では甘藷を琉球芋、又赤芋と言う。



『農業全書』（国立国会図書館デジタルコレクション「インターネット公開保護期間満了」より）

長崎には「三つ葉芋」（西尾市岩瀬文庫所蔵の本草学者小比賀時胤の蕃薯種類之図（文化2年・1805年）がある。葉が農業全書の絵図と近似、また両者とも、外の皮赤く、中身白色である。形状が大きいのは芽条変異と思われる。



（西尾市岩瀬文庫所蔵、小比賀時胤の蕃薯種類之図より）

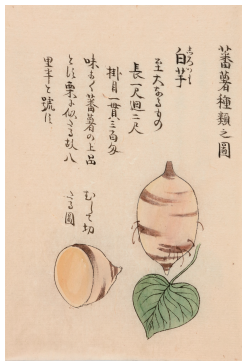
（2）第二次伝来の白芋と黄蕃薯に関わるもの

① 白芋のこと

1717年松岡如庵著「番藷録」（国立国会図書館蔵）によると、「其品有白黄赤三品而白者最勝、曾聞彼国人殊貴重白、嚴禁傳種於他邦、故本邦所有黄朱二種、黄者为白薯」とあり、黄・朱二種のサツマイモは日本本土に移入されているが、最勝の白芋は本土へは、嚴禁とされているという。その結果、1708年貝原益軒「大和本草」『益軒全集卷之六』⁶⁾では、その葉形がハート型の甘藷は元禄の末（1703年頃）より薩州に渡ったというが、その中に白芋は含まれていないと考えられる。

白芋は小比賀時胤著『蕃薯解』（文化2年・1805）⁷⁾の中にある蕃薯種類之図（西尾市岩瀬文庫所蔵）に描かれている。白芋、味よく、蕃薯の上品とす。栗に似たるゆへ八

里半と云うと記されている。また、蒸すと図のように黄白色になる。



白芋
むして切
りたる図

(西尾市岩瀬文庫所蔵、小比賀時胤の蕃薯種類之図より)

② 黄蕃薯のこと

前掲した「琉球国由来記」の他に1731年「琉球国旧記」や1745年「球陽」にも、1694年官人伊舎堂親方盛富が中国（閩）から持ち帰った黄蕃薯は特異別種で風や霜雪の寒さに強く、民の利益になると記されている。『八重山歴史』（喜舎場永珣著八重山歴史編集委員会編）⁸⁾によれば、字新川大史姓の家譜には、1694年に甘藷（黄蕃薯）を八重山に「始め」て伝えたのは西表首里大屋子波照間高康で、その芋種子を官人（伊舎堂親方）に分け与えた。アッコン（「皮赤実黄」）と呼ぶとある。

1720年の西川如見著「長崎夜話草」⁹⁾には、「琉球芋は内外黄色、甘味うすし。凶年の飢えを助け利益尤多し。」とある。また、1801年本草学者小野蘭山の益軒の大和本草の疵醇を批判した書「大和本草批正天之巻」『益軒全集巻之六』¹⁰⁾（抜粋）によると、「甘藷 さつまいも、りうきういも ○一種あかいも、漢名朱薯、皮色紫赤、煮れば肉白して白砂糖の味あり。肥前にてはあかはちりと云う。常種は皮色黄を帯て煮れば肉

黄なり。」あかはちりは葉に五ほどきれあり。」と述べ、蘭山は益軒の蕃薯・甘藷の実態を調べ、「大和本草」の甘藷は皮も実も黄色の芋のことであるとしている。

下の彩色図の左側が根黄色の芋である。この彩色図は1770年幕府医官田村元雄（藍水）が1721年「中山傳言録」（著者琉球に冊封使した徐葆光）を基に、書いた『中山伝信録物産考』の中に描かれている。



番薯（和名 琉球イモ）
に二種というのは、根が赤イモ（右側の図）と黄イモ（左側の図）のことである。

『中山伝信録物産考』番薯図（国立国会図書館デジタルコレクション、「インターネット公開保護期間満了」より）、右側の図は、赤め桐の葉に似ている。後述する薩摩芋の葉の形と同じである。

3. 甘藷翁薩摩の前田利右衛門が琉球から持ち帰った「赤芋」とは

明治14年の第2回内国勸業博覧会に、利右衛門の子孫清左衛門が出品したイモはアカイモであったという（坂井健吉著「さつまいも」¹¹⁾）。ところで、1711年、薩摩に寄った愛媛郡越智郡大三島の下見吉十郎は、薩摩のいもは丸くて大きく、収量も多く腐れにくいというえに甘みも少ないので主食に適していると証言していることから、前田利右衛門が1705年琉球から持ち帰ったサツマイモは、『中山伝信録物産考』番薯図の右側根赤色のイモと考える。

4. 享保の飢饉後青木昆陽が普及した「薩摩芋」とは

青木昆陽の1735年『蕃薯考』「薩摩イモ問答」¹²⁾からわかることは、琉球から薩摩に入ったサツマイモは、1605年の第一次伝来のものでなく、1690年代の第二次伝来のサツマイモである。また、薩摩イモには唐芋と琉球芋があり、琉球芋は実は白で皮が白赤のぼけイモと白イモでハンスイモと呼ばれるが、それ以外は唐芋である。唐芋には、赤きイモがあり、十五日イモとも赤イモともよばれている。

1805年薩摩藩の『成形図説』¹³⁾にも、赤芋・白芋・凡計ぼけなどが紹介されていることで裏付けられる。そこで『成形図説』の赤芋、白芋、木莖芋の彩色図をみる。



白芋
シロイモ

赤芋
アカイモ



木莖芋
ボケイモ

『成形図説五穀部卷二十』 甘藷
(国立国会図書館デジタルコレクション
「インターネット公開保護期間満了」より)

赤芋 鬚（ひげ）多く筋高し、味も劣りぬれども蕃（いも）殖（ふや）し易く、塊（いも）太く且つ多ければ、その利最もあり。

また、『成形図説』と同じころ作成された小比賀時胤著『蕃薯解』（文化2年・1805）の「蕃薯種類之図」（西尾市岩瀬文庫所蔵）に次の薩摩芋の図が記載されている。



薩摩芋
皮は赤く、
肉は黄白

(西尾市岩瀬文庫所蔵、小比賀時胤の蕃薯種類之図より)

薩摩芋 植てから50日余りで実入り故55日芋とも云。味劣る。けれども実多く、貯蔵しても腐ることが少ない。

『中山伝信録物産考』の赤イモと『成形図説』の赤藷そして「蕃薯種類之図」の薩摩芋をみると同じものであることが解る。上の絵図から、薩摩芋は皮が赤で、実が黄白であることが判明したことである。

次に、埼玉県三芳町史史料編¹⁴⁾によると、南永井村弥右衛門が寛延4年（1751）に江戸木挽町の川内屋八郎兵衛の仲介で公許を得、上総国志井津（新田）村（現市原市）の長十郎より種芋を購入し、それがやがて周辺村々に伝播したとある。また、伝統サツマイモ品種「紅赤」発見120年記念『イラスト 紅赤いも歴史物語』¹⁵⁾によると、紅赤は、江戸中期の青木昆陽時代のサツマイモの面影を残す唯一のサツマイモで、最も古い系統のイモで、いもの皮は鮮紅色で、肉質は黄白色で粉質系とある。別表12番を見ると、「伊豆国＝薩摩芋…是は芋種被下置、以後、村々にて作仕、夫食罷成候。」と、昆陽の普及の跡が見える。

以上、青木昆陽が薩摩藩から取り寄せ、普及したサツマイモは、味は劣るが、早く、大きく、収量も多く取れるもので、皮が赤で実が黄白色であることが解る。青木昆陽が、救荒食として普及するには、最適なサ

ツマイモであったのである。

5. 諸国産物帳の中のサツマイモの系統

安田健氏（『江戸諸国産物帳 丹羽正伯の人と仕事』）によると、さつまいもは当時二系統あった。いまの伊豆の場合「赤白二品あり」とあるし、筑前では、唐いも（赤いも）とりうきういも（唐いもとは別種）の二品をあげている。加賀、越中ではその二系統の特性について、りうきういも（甘藷、さつまいも）は、葉は山いもの葉に似て太く長い。色は黄白。赤いも（甘藷の一種、紫藷）は、根はりうきういものに似るがただし色は紫赤、少し小さい。葉は赤～青白、桐の葉に似る。秋土用過ぎでできる、と分析されている。別表28番の肥後国の熊本領＝蕃薯（りうきういも）とあるが、その他に唐芋（からいも）や甘藷（白芋か）がある。蕃薯は、農業全書の蕃薯（あかいも・りうきういも）と思われる。

そこで、1735年諸国産物帳のサツマイモの判別基準は何であろうか。これは、1709年「大和本草」を著わした貝原益軒に従っていると思われる。実例として別表25番の對馬國の孝行いもは『大和本草』にいう甘藷とし、あかいもは『大和本草』にいう蕃薯とあり、また、別表7番の越中国（砺波郡）＝りうきういも（甘藷の内）芋長く色黄白し、あかいも（甘藷の内）芋長く色赤しとあることからである。

6. おわりに

琉球・沖縄に第一次伝来した赤芋や第二次伝来した黄蕃薯・白芋のサツマイモが、鹿児島に渡り、九州に普及する。また、諸国産物帳により、享保の飢饉前のサツマイ

モが一部諸藩に作付けされている様子が確認できた。幕府は、1732年享保の飢饉後青木昆陽を通して救荒食としてサツマイモを奨励するが、そのイモは、1694年に伊舎堂親方盛富が中国から持ち帰った黄蕃薯で、さらに1705年薩摩山川郷の前田利右衛門が琉球から持ち帰った肉質は黄白色の赤芋（黄蕃薯）であることが判明した。本論考が、今後のサツマイモの歴史文化研究の一助になればと幸いである。拙稿は、長年の先輩各位のご助言ご指導のおかげでまとめることが出来ました。改めて感謝致します。

参考・引用文献

- 1) 安田健氏『江戸諸国産物帳 丹羽正伯の人と仕事』（晶文社、1987年、18、53、109～111頁）。
- 2) 『八丈島誌』（編纂者東京都八丈島八丈町教育委員会、昭和48年、186頁）「享保八卯年、享保十二末年 薩摩芋種 公命御厚情之御仁恵を以、被差遣候品」。
近藤富蔵著「八丈実記」（日本庶民生活史料集成 第一巻、編者宮本常一、原口虎雄、比嘉春潮、1968年、三一書房、709～841頁）。「白サツマハ享保十二年」。
- 3) 「琉球國由来記卷三」『琉球史料叢書第一』（編纂者伊波普猷・東恩納寛惇・横山重、名取書店、1940年、94、95頁）。
- 4) 『新コリア百科』むくげの会編、明石書店、2001年、434頁）。
- 5) 藤野保氏「甘藷の関東伝播に関する一資料」（『地方史研究20』1956年）。
- 6) 貝原益軒著「大和本草」（宝永5年・1708）『益軒全集卷之六』（発行所益軒全集刊行部、明治44年、122、123頁、熊本県立図書館蔵）

- 7) 『蕃薯解』(小比賀時胤著・文化2年(1805)の「蕃薯種類之図」モノクロ(日本農書全集七〇 学者の農書2、農山漁村文化協会、1996年、237頁)。原本は不明、写本(彩色図6種類)は西尾市岩瀬文庫所蔵。
- 8) 喜舎場永珣著『八重山歴史』(八重山歴史編集委員会編、1954年、121、122頁)。
- 9) 西川如見著「長崎夜話草」(『南蠻稀聞帳』潮文閣、昭和4年、77・78頁)。
- 10) 小野蘭山著(1801年)「大和本草批正 天之巻」『益軒全集巻之六』539頁。
- 11) 坂井健吉著「さつまいも」(法政大学出版局、1999年、105～107頁)。
- 12) 山田尚二氏『さつまいも』(春苑堂書店、平成6年、172頁)。国立国会図書館所蔵『蕃薯考』『薩摩いも』参照。(インターネット閲覧)
- 13) 「成形図説」甘藷(現代語訳)山田尚二、鹿児島さつまいも同好会、平成5年。国立国会図書館所蔵『成形圖説』巻之二十「甘藷」参照。(インターネット閲覧)
- 14) 『三芳町史史料編Ⅰ』編集三芳町史編集委員会、発行三芳町、1986年、217頁。
- 15) 『イラスト 紅赤いも歴史物語』著者(文)井上 浩氏(イラスト)山田英次氏、(2017年、発行川越いも友の会・川越サツマイモ商品振興会)23頁。